

日本の火山活動概況 (2005年3月~4月)

気象庁

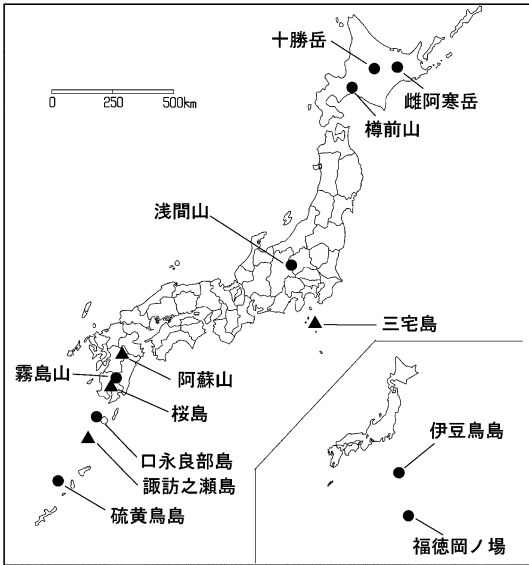


図 1. 2005年3月~4月に目立った活動があった火山
▲: 噴火した火山
●: 活動が活発な状態にあるか、もしくは観測データ等に変化があった火山

●雌阿寒岳 (43°23'12"N, 144°00'32"E)

※各火山の位置は世界測地系による。

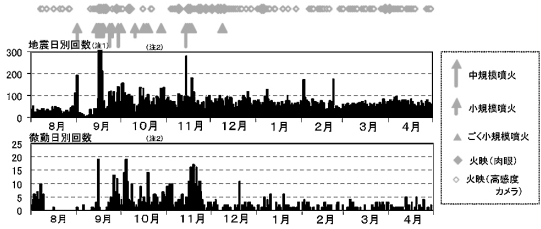
ボンマチネシリ96-1火口は、噴煙の状況に変化はなく、高温の状態が続いていたと推定される。地震及び微動の発生状況、地殻変動の状況等に特に変化はなかった。

●十勝岳 (43°25'05"N, 142°41'11"E)

62-2火口は、噴煙活動の活発な状態が続き、高温の状態が続いていたと推定される。遠望カメラによる観測では、噴煙は白色で高さは概ね火口縁上200mで推移した。地震及び微動の発生状況、地殻変動の状況等に特に変化はなかった。

●樽前山 (42°41'26"N, 141°22'36"E)

A火口及びB噴気孔群は、噴煙の状況に変化はなく、高温の状態が続いていたと推定される。地震及び微動の発生状況、地殻変動の状況等に特に変化はなかった。



(注1) 9月16日の地震回数は1,406回17日は同624回。
(注2) 10月23日は新潟県中越地方の地震により18~23時の計数不能。

図 2. 浅間山 2004年8月~2005年4月の噴火、火映、地震及び微動の日別発生状況

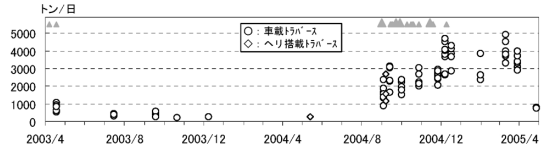


図 3. 浅間山 二酸化硫黄の放出量の推移 (2003年4月~2005年4月)
大きい▲は中爆発、小さい▲は小噴火以下を示す。

●浅間山 (36°24'23"N, 138°31'23"E)

山頂火口からは、白色噴煙が連続的に噴出し、最高で火口縁上約900mまで上がった。また、火口内の熱的な状態が高いことを反映して、微弱な火映が山麓の高感度カメラ¹⁾ではば連日観測され、3月30日夜には火口の北北東4km付近から、4月2日夜には軽井沢測候所(火口の南約8km)から肉眼でも観測された(図2)。

二酸化硫黄の放出量の観測を3月10日、29日及び4月27日に行った。3月の観測では日量2,300~4,900トンと依然多い状態であったが、4月の観測では日量約800トンと3月に比べ少ない状態であった(図3)。

3月8日及び4月27日に上空から観測を行った²⁾。3月の観測では噴煙のため火口内の状況は確認できなかったが、4月の観測では、火口底に昨年9月の噴火活動に伴い噴出したとみられる直径約150mの溶岩があり、その中心にはその後の爆発的噴火で吹き飛ばされたとみられるくぼみが確認された。また、くぼみの中心には数カ所の噴気孔が確認された。火口底の深さや溶岩の大きさは、昨年10月の観測以降大きな変化はみられていない。

火山性地震は依然としてやや多い状態が続き、1日あたり47～95回で推移した。震源は火口直下の深さ約1～3kmで、特段の変化はなかった。火山性微動も依然としてやや多い状態が続き、1日あたり0～5回で推移した(図2)。火山性微動もやや多い状態が続き、1日あたり0～5回で推移した(図2)。

傾斜計及びGPSによる地殻変動観測、光波測距観測では特に顕著な変化はなかった。

- 1) 気象庁及び国土交通省関東地方整備局利根川水系砂防事務所が山麓に設置。
- 2) 長野県消防防災ヘリコプターより、気象庁と東京大学地震研究所が共同で実施。

▲三宅島 (34°04'37"N, 139°31'34"E)

多量の二酸化硫黄の放出が続いた。4月12日にごく小規模な噴火が発生した。

4月12日04時45分に空振を伴う低周波地震が発生し、三宅村神着、三宅村坪田で震度1が観測された。地震発生時は天候が悪く噴煙の状況は確認できなかったが、12日午前中に三宅島測候所が行った現地調査により火口の南西約4km付近の狭い範囲でごく微量の降灰が確認されたことから、噴火の発生が確認された。噴火時刻は、低周波地震の発生した04時45分頃と推定される。山麓で降灰が観測される程度の噴火が発生したのは昨年12月9日以来であった。

噴煙活動は引き続き活発で、白色噴煙が山頂火口から連続的に噴出した。期間中の噴煙の高さの最高は火口縁上約1,000mであった(前期間の最高は火口縁上約1,000m)。

上空からの観測³⁾では、噴煙活動に大きな変化はみられず、山頂火口周辺及び火口内の状況も大きな変化はみられなかった。火山ガスの観測では、二酸化硫黄の放出量は日量2,400～6,900トンと依然として多い状態であった(図4)。赤外熱映像装置⁴⁾による観測では、火口内の最高温度は87～150℃以上⁵⁾で大きな変化はなかった。また、全磁力の連続観測では特に変化はみられず、地下の熱的な状態に大きな変化はないものと考えられる。

地震活動は、上記の噴火を伴う低周波地震のほか、3月12日(59回)、19日(25回)、4月3日(111回)、11日(63回)及び20日(37回)に地震が一時的に増加した(括弧内は日回数)。その他の日は少ない状態であった。3月12日は03～05時台に一時的に増加し、そのうち05時23分及び05時24分には空振を伴う低周波地震が観測され、05時23分の地震では三宅村神着及び三宅村坪田で震度1、05時24分の地震では三宅村神着で震

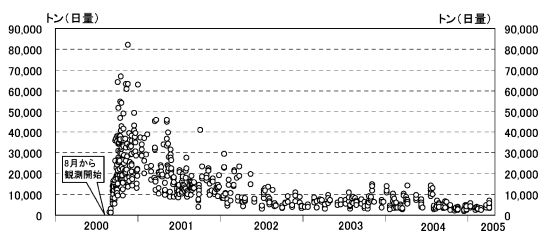


図4. 三宅島 二酸化硫黄の放出量(日量に換算)(2000年～2005年4月)

2002年秋以降、日量3千～1万トン程度で横ばい傾向を示していたが、2004年秋以降は、日量2千～5千トン程度とやや少なくなっている。

度1が観測された。3月19日は09時～11時台に一時的に増加し、そのうち11時51分及び11時53分に観測された低周波地震では三宅村神着で震度1が観測され、地震に伴い弱い空振も観測された。4月3日は17～20時台に一時的に増加し、そのうち20時32分に観測された低周波地震では三宅村神着で震度1が観測された。4月11日は17時台に一時的に増加した。4月20日は12時台に一時的に増加し、そのうち12時50分に観測された低周波地震では三宅村神着で震度1が観測された。これらの地震活動では、噴煙活動等その他の観測データに特に変化はみられず(4月の活動では悪天のため噴煙の状況不明)、地震発生後に行った現地調査でも降灰等は確認されなかった。

2000年7月から継続している火山性連続微動の振幅は、3月にはノイズレベルと同程度まで小さくなった。また、GPS観測では地殻変動の傾向に変化はみられなかった。

³⁾3月1日及び22日、4月5日に陸上自衛隊、海上保安庁及び海上自衛隊の協力により気象庁が実施。

⁴⁾赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感知して温度分布を測定する測器であり、熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。

⁵⁾観測環境に制限があったため、150℃を超える温度であることは観測されたが、最高値は不明。

●伊豆鳥島 (30°29'02"N, 140°18'11"E (硫黄山))

3月9日に海上保安庁が行った上空からの観測によると、硫黄山火口付近の2ヶ所からごく薄い噴気が立ち上がっているのが確認された。前回の観測(2004年10月12日)では噴気は確認されておらず、噴気が確認された

のは2004年8月25日の同庁の上空からの観測（硫黄山火口付近で確認）以来であった。

●福徳岡ノ場（24°17.1'N, 141°28.9'E）

3月9日に海上保安庁が行った上空からの観測によると、福徳岡ノ場から南へ延びる長さ約1,500m、幅約300mの黄緑色変色水が確認された。

▲阿蘇山（32°53'01"N, 131°05'49"E（中岳））

4月14日にごく小規模な噴火が発生した。

4月14日09時頃に、阿蘇山市上事務所から、山上広場でごく少量の降灰があったとの通報があった。その後及び同日午後阿蘇山測候所（以下、測候所）が行った現地観測によると、降灰が主に中岳第一火口（以下、火口）の南側と北東側の火口中心から約700m付近まで分布しているのが確認された（図5(a)）。また11時頃には火口北側でごく少量の火山灰が降っているのが確認された。噴火が観測されたのは、昨年1月14日に大規模な土砂噴出が発生し、山腹で降灰が確認されて以来であった。

4月14日20時41分に規模の大きな土砂噴出を伴うと推定される火山性微動が観測された。測候所が翌15日に行った現地観測によると、火口内の湯だまり周辺及び火口壁北側から東側の一部に黒っぽい土砂が付着しているのが確認され、14日20時41分頃にごく小規模な噴火が発生したと推定された。4月15日に行った上空からの観測⁶⁾では、火口内や火口周辺で新たな熱異常は確認されず、また火口外に新たな火山灰は確認されなかったが、4月19日に測候所が行った現地観測では火口から北東側約2kmの仙酔峡付近まで火山灰が付着しているのが確認され（図5(b)）、4月14日夜のごく小規模な噴火によるものと推定された。

火口では、湯だまり⁷⁾の色は4月15日に灰色から黒灰色に変色し、湯だまり量は3月8日の観測で約4割から約3割、4月8日の観測で約3割から約2割に減少した。湯だまりの表面温度⁸⁾は66~78°Cで依然として高い状態であった（前期間は59~74°C）。火口壁の温度⁸⁾の最高は3月16日に観測された114°Cであった（前期間は2月14日に観測された106°C）。湯だまり内では土砂噴出が観測され、高さは3月には中央部で約10m、4月には中央部と北側で約5m、その他数ヶ所で2~3mであった。

噴煙の状況は、今期間を通じて白色で、噴煙高度の最高は火口縁上約600mと通常と比べ変化はなかった。

4月16日01時28分から火山性連続微動が観測され期間を通して継続し、4月28日08時頃から振幅がやや

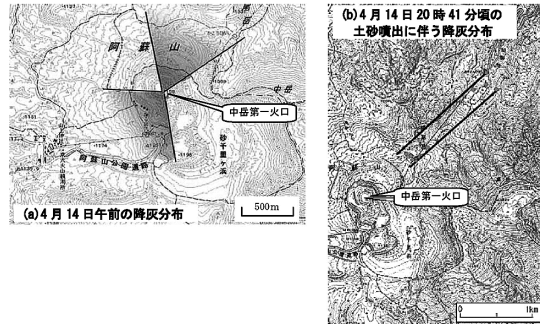


図5. 阿蘇山 4月14日に発生したごく小規模な噴火に伴う降灰分布

(a) 4月14日午前の降灰分布

(b) 4月14日20時41分頃の土砂噴出に伴う降灰分布

(●: 降灰確認場所. 実線: 降灰分布域の境界線.)
地図は国土地理院発行2万5千分の1地形図「阿蘇山」を引用

大きくなった。孤立型微動は、1日当たり29~207回発生し、月回数は3月2,260回、4月4,743回と前期間（1月2,424回、2月1,740回）より増加し、4月はやや多い状態であった。火山性地震は、A型地震が月回数3月88回、4月56回で前期間（1月145回、2月103回）より減少し、B型地震が月回数3月1,024回、4月809回で引き続きやや多い状態であったが（前期間は1月811回、2月808回）、4月20日以降は少なくなった。

GPSによる地殻変動観測では火山活動に起因する変化はみられなかった。

⁶⁾ 国土交通省九州地方整備局の協力により、気象庁が実施。

⁷⁾ 湯だまり：活動静穏期中岳第一火口内には、地下水などを起源とする約50~60°Cの緑色のお湯がたまっており、これを湯だまりと呼んでいる。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少がみられ、その過程で土砂を吹き上げる土砂噴出現象等が起こり始めることが知られている。

⁸⁾ 赤外放射温度計による。赤外放射温度計は物体が放射する赤外線を検知して温度を測定する測器であり、熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。

●霧島山（31°56'03"N, 130°51'42"E（韓国岳））

御鉢火口内で2003年12月に確認された噴気孔からの噴気活動は、消長を繰り返しながらも依然としてやや活発で、監視カメラで火口縁上50~300mまで上がる噴気

が時々観測された。

3月には御鉢付近で火山性微動が4回観測されたが、いずれも継続時間の短いものであった。新燃岳付近及び御鉢付近の地震活動は低調で、新燃岳付近では火山性微動は観測されなかった。

GPSによる地殻変動観測では火山活動に起因する変化はみられなかった。

▲桜島 (31°34'38" N, 130°39'32" E (南岳))

期間中、ごく小規模な噴火は発生したが、爆発的噴火等⁹⁾は観測されなかった。鹿児島地方気象台(南岳の西南西約11km)で降灰は観測されなかった。

火山性地震は総じて少ない状態にあるが、A型地震の発生はやや多い状態が続いており、今期間は3月に13回、4月に17回発生した(前期間は1月36回、2月33回)。A型地震の震源は、南岳火口の東約1.5kmの海面下3~4km付近、北岳火口北東部約1kmの海面下1~2km付近、南岳火口周辺の海面下0~5km付近等に分布した。

GPSによる地殻変動観測では、連続観測で、昨年11月頃から本年2月にかけて、山頂を囲む各観測点間の距離の伸びにやや加速する傾向がみられていたが、3月から伸びの傾向が緩やかになった。

⁹⁾桜島では噴火活動が活発なため、気象庁では、噴火のうち、爆発的な噴火もしくは一定の規模以上の噴火の回数を桜島の噴火の回数として計数している。今期間はこれらに該当する噴火は観測されなかった。

●口永良部島 (30°26'36" N, 131°13'02" E (古岳))

火山性地震は、月回数が3月170回、4月72回と前期間(1月346回、2月234回)より減少したものの、引き続きやや多い状態であった。火山性微動は継続時間の短いものが時々発生し、月回数は3月21回、4月23回と前期間(1月59回、2月36回)より減少した(図6)。

監視カメラ(新岳の北西約4kmに設置)による観測では、3月19日、30日及び4月27日に、新岳火口の北側の噴気地帯から白色でごく少量の噴気が上がっているのが確認され、高さの最高は4月27日の約30mであった。

3月2日に海上自衛隊鹿屋航空基地救難飛行隊の協力で上空から行った観測によると、赤外熱映像装置⁴⁾による観測で、新岳火口底及び周辺部では前回観測時(2004年2月16日)と比べ温度の高い領域がやや広がっており、温度の上昇も確認された(最高温度は前回27.0℃、今回36.7℃)。新岳、古岳周辺では多少の噴気の増加は認められたが、大きな変化はみられなかった。

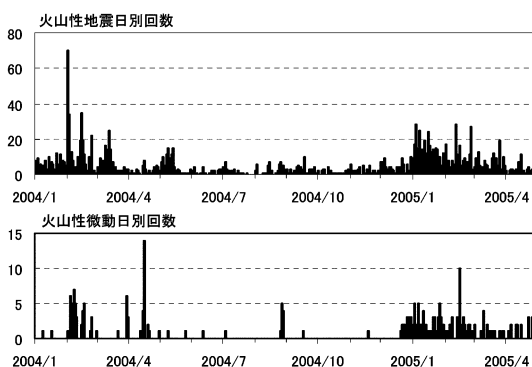


図 6. 口永良部島 火山性地震及び微動の日別発生回数(2004年1月~2005年4月)

福岡管区気象台が4月21~26日に実施した現地観測によると、新岳の噴気活動や火口の状況に大きな変化はみられなかった。

▲諏訪之瀬島 (29°38'18" N, 129°42'50" E (御岳))

噴火が3月1~2日、6~10日、12~14日、20日、4月4~6日、8日、23日及び25~27日に発生した。爆発的噴火はなかった。

十島村役場諏訪之瀬島出張所からの報告及び遠望監視カメラ¹⁰⁾による観測によると、火山灰を含んだ噴煙の最高高度は、3月8~10日及び4月25~27日の火口縁上約1,000mであった。また、3月1日、2日、20日及び4月26日に、集落(御岳の南南西約4km)で少量の降灰があった。

火山性連続微動が3月6~15日、21日、4月4~8日及び23~27日に断続的に観測された。特に4月23~27日に観測されたものは振幅のやや大きなものであった。

¹⁰⁾御岳の北北東約25kmの中之島に気象庁が設置。

●硫黄島島 (27°52'52" N, 128°13'20" E)

硫黄島島の南東約65kmにある沖永良部島の住民から、4月25日17時30分頃、北西方向に噴煙が見えたとの目撃情報があった。翌26日に海上保安庁第十一管区海上保安本部が上空から実施した観測によると、硫黄島島の硫黄山火口(北側の火口)及びグスク山火口(中央部の火口)内の噴気孔から白色の噴煙が上がっており、うち硫黄山火口の噴煙は火口縁上の高さ約500mまで上がっているのが確認された。

気象研究所と東京大学地震研究所が共同で実施している震動観測によると、地震活動に特に変化はみられなかった。

海上保安庁によると、硫黄島では昨年8月及び9月の観測で白色の噴煙が確認されたが、同11月の観測では噴煙は確認されなかった。

(文責: 気象庁火山課 長谷川嘉彦)

○教員公募のおしらせ

【北海道大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻】

1. 職種・人員・専攻分野: 地球惑星物質圏科学講座
助手1名。

専攻分野: 岩石学および火山学。地質学的、岩石学的、地球化学的あるいは実験的手法で、火山・噴火およびマグマの研究・教育を行える人。

2. 応募資格: 博士号を取得していること
3. 着任予定時期: 採用決定後、できるだけはやく
4. 応募書類
イ) 履歴書(内外の学会活動, 受賞歴, 企画・参加した(進行中も含む)プロジェクト研究歴, 各種研究費受領歴なども記載すること)
ロ) これまでの研究経過(2,000字程度)
ハ) 研究業績目録(和文のものは和文で表記すること)
A. 査読のある原著論文
B. 査読のない論文, 総説など
C. 著書
D. 解説, 報告などその他の出版物で特に参考になるもの
ニ) 主な原著論文の別刷または著書 5篇以内(複写可)
ホ) 今後の教育・研究の計画・抱負(2,000字程度)
ヘ) 応募者について照会が可能な方2名の氏名と連絡先

5. 応募締め切り: 2005年9月12日(月)必着
封筒の表に「教員公募関係」と朱書し, 簡易書留にて郵送すること。また, 公募書類中の第1ページに応募先講座名・職種を明記すること。

6. 書類の送付先及び問い合わせ先:
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目
北海道大学 大学院理学研究科 地球惑星科学専攻
中川光弘

電話: 011-706-3520 (ダイヤル・イン)

FAX: 011-746-0394

電子メール: nakagawa@ep.sci.hokudai.ac.jp

地球惑星科学専攻 教員構成(2005年5月27日現在)

- ・地球惑星物質圏科学講座
- 教授 藤野清志, 小笹隆司, 中川光弘, 坂本尚義
- 助教授 新井田清信, 橋元明彦, 角皆 潤, 永井隆哉
- 講師 三浦裕行

助手 中川書子, (本公募)

- ・地球惑星進化科学講座

教授 岡田尚武, 鈴木徳行, 竹下 徹

助教授 川村信人, 西 弘嗣, 阿波根 直一

講師 沢田 健, 渡邊 剛

助手 岩田圭示, 前田仁一郎

- ・地球惑星流体科学講座

教授 渡部重十, 林 祥介, 見延庄士郎

助教授 知北和久, 倉本 圭

講師 遊馬芳雄

助手 小高正嗣

- ・地球惑星物理科学講座

教授 小山順二, 蓬田 清, 池田隆司, 日置幸介

助教授 森谷武男, 笹谷 努, 前田 亟

助手 吉澤和範

- ・地震火山研究観測センター(協力講座)

教授 笠原 稔, 岡田 弘, 茂木 透

助教授 高波鐵夫, 大島弘光, 谷岡勇市郎, 橋本武志

助手 勝俣 啓, 高橋浩晃, 村井芳夫, 森 濟,

西村裕一, 青山 裕

- ・総合博物館(教育協力)

教授 松枝大治

助手 小林快次

なお, 教育・研究にあたっては上記の講座制にかかわらず, 研究室・グループ制で運営されており, その構成は変更が可能です。また全教官は, 大学院教育のほか, 全学教育・学部教育も担当しています。理学研究科では平成18年度に改組を計画しており, 地球惑星科学専攻もその対象となります。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月27日送信しました)

○教員公募のおしらせ

【東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻】

1. 募集人員: 地球惑星科学専攻 教授 2名

専門分野: 地球惑星科学

本専攻は講座・研究室の枠を超えた研究・教育・運営を目指しており, 着任後は大学院・学部の研究・教育・運営に携わっていただきます。地球惑星科学の幅広い分野からの応募を期待します。

2. 応募資格: 博士の学位を有する者
3. 着任時期: 採用決定後, できるだけはやい時期を希望します。
4. 提出書類
(1) 履歴書(市販のもので可)
(2) これまでの研究・教育の実績(2,000字程度)

(3) 研究業績リスト

- A. 査読付き原著論文
- B. プロシーディングス, 総説など
- C. 著書, その他特記すべき出版物 (いずれも和文のものは和文で表記すること)

- (4) 主な原著論文の別刷 (コピー可) 5 篇以内
- (5) 今後の研究・教育の計画・抱負 (2,000 字程度)
- (6) 応募者について参考意見をうかがえる方 (国内 2 名, 海外 2 名) の氏名および連絡先 (所属, 住所, E-mail)

5. 応募締め切り: 2005 年 7 月 29 日 (金) 必着
封筒の表に「教授公募書類」と朱書して, 宅配便等で送付してください。

6. 提出書類の送付先及び問い合わせ先:
〒152-8551 東京都目黒区大岡山 2-12-1 I2-20
東京工業大学大学院理工学研究科地球惑星科学専攻
綱川秀夫
E-mail: htsuna@geo.titech.ac.jp
Tel: 03-5734-2339

地球惑星科学専攻教員の構成 (2005 年 6 月 1 日現在)
教授: 本藏義守, 長井嗣信, 丸山茂徳, 高橋栄一, 河村雄行, 中澤 清, 綱川秀夫, 加藤 學 (連携, JAXA)
助教授: 金嶋 聰, 藤本正樹, 廣瀬 敬, 井田 茂, 平田岳史, 北村良実 (連携, JAXA)
助手: (専攻助手) 松島政貴, 小林直樹, 岡元太郎, 榎森啓元, (COE21「地球」助手) 生駒大洋, 伊藤正一, 西原 遊, 村上元彦 (地球惑星科学専攻 所属), (理学研究流動機構助手) 小宮 剛 (地球惑星科学専攻が支援専攻)

※COE21「地球」が平成 16 年度に採択され, 本専攻が中心となり他専攻・他研究科とともに活動しています。
(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 6 月 14 日送信しました)

○<EPS special section for the 2005 West Off Fukuoka Prefecture Earthquake>

We now invite you to the special section of EPS for the earthquake in the western Off-shore of Fukuoka Prefecture, Japan, on 20 March 2005. Any papers related to this earthquake are welcome, but we shall accept only papers of the "letter" style for this special section in order to publish scientific results on these events promptly. We shall try to process the submitted papers as rapidly as possible. Each letter should not exceed 6 pages in print.

Contributors to this special section should submit their papers to the editorial office of EPS, following the instruc-

tions for submission of papers as "letters" to the regular section. For details, please visit <http://www.terrapub.co.jp/journals/EPS>.

Please state in your cover letter that you submit your paper to "Special section for the 2005 West Off Fukuoka Prefecture Earthquake". We ask you to attach the list of five potential referees of your manuscript, including two or three researchers outside Japan, if possible.

You may also submit your paper electronically. In this case, please send files for the manuscript and the figures to eps@terrapub.co.jp. If papers are accepted, the authors will receive instructions for the final manuscript from the editorial office.

We set the final deadline for this special section on 10 August, 2005, but we encourage potential contributors to submit papers as soon as possible, so that your paper can be included. This special section will preferably be the December issue.

For more information, please send an email message to the Editor-in-Chief of EPS (eps-ed@belinda.sci.hokudai.ac.jp). (上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 6 月 14 日送信しました)

○国際シンポジウムのお知らせ

東北大学 21 世紀 COE プログラム「先端地球科学技術による地球の未来像創出」の一環として, 国際シンポジウム「固体地球における時空間的ゆらぎ—地球の未来像創出をめざして—」を 2005 年 7 月 22 日~24 日に仙台で開催します。これに引き続き, 磐梯山の巡検 (25 日) と夏の学校 (26 日~27 日) を開催します。詳しくは下記の web をご覧ください。夏の学校では, 海外招待者 (6 名を予定) が大学院生対象の講義を行います。

<http://www.aob.geophys.tohoku.ac.jp/~matuzawa/21COE2005/>

開催日: 2005 年 7 月 22-24 日 (シンポジウム),
25 日 (巡検), 26-27 日 (夏の学校)
会 場: 仙台市戦災復興記念館 (シンポジウム), 磐梯山 (巡検), 東北大学大学院理学研究科 (夏の学校)
参加申込と予稿原稿の締切: 平成 17 年 6 月 17 日 (金)
招待講演者: S.H. Kirby, J.T. Freymueller, R.M. Nadeau, S.G. Wesnouskey, V. Accocella, D.A. Wark, M. Ripepe, S. McNutt, B. Buffett, 遠田晋次, 小原一成, 加藤尚之, 飯尾能久, 中田 高, 東宮昭彦, 竹内晋吾, 木村純一, 野上健治, 井口正人, 趙大鵬, 廣瀬 敬, 八木健彦, 桂 智男, 末次大輔 (以上承諾済)

シンポジウム実行委員会: 松澤 暢 (委員長), 鈴木昭夫, 寺崎英紀, 中島淳一, 長濱裕幸, 中村教博, 中村美千彦, 西村太志, 山本 希
(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月19日送信しました)

○第130回気象記念日「地震・津波フォーラム」の開催について

気象庁では、来る6月1日の第130回気象記念日に、記念事業として「地震・津波フォーラム—あらためて思う防災の大切さ—」を、イノホール(千代田区内幸町)で開催します。このフォーラムへの参加は無料で、予約の必要はありません。

開催日: 平成17年6月1日(水) 受付・開場 13:00
会場: イノホール 東京都千代田区内幸町2-1-1

03-3506-3251

第1部 講演 13:40-15:00

「災害国に生きる私たち」石黒 耀 勤務医・作家
「インド洋大津波災害に学ぶ」今村文彦 東北大学教授

第2部 パネルディスカッション 15:10-16:30

「日本人の防災意識」「情報の活用」

コーディネーター 片田敏孝

パネリスト 石黒 耀, 今村文彦, 小澤邦雄, 上総周平, 東方幸雄, 西出則武, 平野啓子, 松本浩司

問い合わせ: 気象庁広報室 03-3212-8341 (内線) 2126
以下は、気象庁ホームページでのご案内です。

http://www.jma.go.jp/JMA_HP/jma/press/0505/10a/jisin_forum.html

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月19日送信しました)

○IAVCEI 爆発的火山活動委員会 (Commission on Explosive Volcanism) の新期ホームページ開設のお知らせ

産総研の宝田です。2005年秋にチリで開催された IAVCEI General Assembly で、タスマニア大学の Sharon Allen とともに、2008年までの爆発的火山活動委員会 (CEV) のリーダーに選出されました。今期の活動では、これまでに行われて来たような巡検や Newsletter に加えて、若手研究者の紹介や、世界各国の大学や研究室の紹介、火山噴出物の調査分析方法の紹介、教育に使える

写真やビデオ等の教材の提供なども行っていきたいと考えております。活動の手始めに下記の CEV のホームページを立ち上げましたので、ぜひご覧頂ければ幸いです。まだ未完成のページもありますが、少しずつ内容を増やしていく予定です。

<http://staff.aist.go.jp/s-takarada/CEV/>

来年までに開催される学会やワークショップの紹介ページ (UpcomingEvents) や、昨年のチリでの会議の後開催されたソコンパ火山での巡検の紹介ページ (Reports) もあります。大学院生から博士号取得5年程度までの若手研究者の紹介ページ (Young Researchers) もありますので、ぜひ研究室の学生やポスドクをご紹介頂ければ幸いです。また、大学や研究所の研究活動ページ (ResearchActivities) にも紹介記事をお寄せ頂ければ幸いです。CEV のメンバー料は無料です。CEV の活動に参加されたい方は、宝田までご連絡ください。メンバー間の情報交換用のメーリングリストに登録させていただきます。もし、まだ IAVCEI の会員になっておられない方は、ぜひこの機会にできれば会員登録していただければ幸いです。 <http://www.iavcei.org/>
(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに6月16日送信しました)

○訃報

フィリピン火山地震研究所 (PHIVOLCS) の元所長である Dr. Raymundo Punongbayan が4月28日午後、搭乗していたフィリピン空軍のヘリコプターの墜落により亡くなりました。Punongbayan 博士は現在フィリピン赤十字社の理事で、上空からの地すべり地域の調査中の事故だったようです。

事故機には、4名の空軍の乗務員と、Punongbayan 博士を含む4名の科学者が搭乗していましたが、生存者はいませんでした。また、京都大学に留学していた Jessie Daligdig も同機に搭乗して亡くなりました。

詳しい情報は、フィリピン赤十字のホームページに掲載されています。

<http://www.redcross.org.ph/news/ray-dies.htm>

(萬年一剛会員投函)

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに5月6日送信しました)